



Title	江隆基試論
Author(s)	三田, 剛史
Citation	明治大学教養論集, 541: 173-196
URL	http://hdl.handle.net/10291/20535
Rights	
Issue Date	2019-09-30
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

江隆基試論

三 田 剛 史

一 中華人民共和国建国 70 周年における江隆基

2019年3月18日の中国共産党甘肅省委員会機関紙『甘肅日報』は、1面であつての蘭州大学学長江隆基（1905～1966年）を取り上げた。「江隆基：蘭州大学を“黄金時代”に引き入れる」と題されたこの記事は、中華人民共和国建国70周年と、蘭州大学創立110周年を記念するために始まった連載の第1回である。古代シルクロードの要衝であつた甘肅省の省都蘭州市の中心部に位置する蘭州大学の校内に立つ江隆基の像には、毎年清明節に学生と教員により花が供えられるという。江隆基は、「優秀な中国共産党員、卓越したマルクス主義教育家」⁽¹⁾で、蘭州大学に「黄金時代」をもたらした教師として讃えられている。記事の本文は以下のように始まっている。

「1959年1月最後の日、江隆基は蘭州大学学長に任命された。この時以来、彼の名は蘭大の名と固く結びつくことになった。

その年の3月、江隆基は全校の学生教員に演説を行った。その演説は3時間に及び『教学秩序の安定と教学の質の向上』を巡って展開された。蘭州大学の徐躬耦教授の回想によると『学生教員は演説を聴き

(1) 「江隆基：帶領蘭州大学進入“黄金時代”」『甘肅日報』2019年3月18日、1面。
以下、中国語文献の和訳は全て引用者による。

終わると、実事求是の演説だったとみな思い、大変鼓舞された』とのことである。」⁽²⁾

続いて同記事では、当時蘭州大学に在学した学者たちの回想から、以下のように江隆基の人物像を描いている。江隆基は「教師を尊重つまり知識を尊重し、科学を尊重し、先人の労働を尊重する」人であった。若い教員に対しても敬意を払い、江隆基自身はどんなに忙しくても学内で週に一度は授業を聴いていた。また、いつも学生のために心をくだき、その地位故に自身に支給された牛脂や白糖などの食品を病気の学生や幼稚園児に回したり、学長用の公用車に自分は乗らずもっぱら急病の学生などに無料で使わせていた。教育に対する情熱、教員に対する尊重、学生に対する愛情により、江隆基が在職した7年間で、蘭州大学は教育、研究、経営管理のレベルを上げ、素晴らしい学風を育てていった。

型どおりの社会主義道徳を鼓吹している風があり、地位・権力のあるものがその利を弱者に賜与しているようにも見えるが、この記事から江隆基が現代中国において高い評価を与えられた教育者であることは看取される。一方で、江隆基がなぜ蘭州大学に赴任し7年間だけ在職したのかについては、触れられていない。さらに蘭州大学に在職した最後の年である1966年が、同時に江隆基の死の年であったことにも全く言及していない。蘭州大学に在職したのが、1959年から1966年までであったこと、赴任当初の演説で「教学秩序の安定」を訴えたことに注意しながら、江隆基の事績の一端を繙いていきたい。それに先立ちなぜ江隆基を取り上げるのかを簡単に説明する。

(2) 同上。

二 戦前期日本の中国人留学生

日清戦争以後第二次世界大戦終結まで、中国から多数の留学生が来日し、日本において近代的学問を摂取し、あるいは日本で様々な政治、文化活動を行い、中国人日本留学者が中国の近代化や革命に様々な役割を果たし、中国の政治・経済・文化や日中関係に影響をおよぼしてきた。実藤恵秀の『中国人日本留学史稿』（日華学会、1939年）を嚆矢として、この分野における研究には既に豊富な蓄積がある。見城悌治は、戦前期の中国ないしアジア人留学生に関する最近の研究の新潮流を、①文系学生に限らない分析対象学生の多様化、②帰国後の活動の検討、③中華人民共和国成立以後に対する研究、④戦時下の留学生に対する研究、とまとめている⁽³⁾。また、個々の人物研究のみならず、修学分野別の研究や受入学校別の研究も進展してきたとも指摘している⁽⁴⁾。受入学校別留学生研究の最新の成果としては、李成市・劉傑編『留学生の早稲田—近代日本の知の接触領域』（早稲田大学出版部、2015年）、見城悌治著『留学生は近代日本で何を学んだのか—医薬・園芸・デザイン・師範—』（日本経済評論社、2018年）、高田幸男編『戦前期アジア留学生と明治大学』（東方書店、2019年）などが挙げられる。『留学生の早稲田』は、早稲田大学に学んだ大陸中国、朝鮮半島、台湾出身学生の留学における「主体性」に着目して彼らを論じている。見城の『留学生は近代日本で何を学んだのか』は、千葉大学の前身諸学校における留学生の研究であり、医学・薬学、園芸、デザインなど、実学分野を主とする学校別・分野別留学生研究であると同時に、留学生の生活の諸相にも立ち入って論じている。『戦前期アジア留学生と明治大学』は、「民主化」と「留学経験」を「キイ概

(3) 見城悌治『留学生は近代日本で何を学んだのか—医薬・園芸・デザイン・師範—』日本経済評論社、2018年、4頁。

(4) 同上、5、6頁。

念」として、明治大学のアジア留学生を分析した共同研究の成果である。

魯迅(1881～1936年)や周恩来(1898～1976年)らの著名人をはじめとして、日本に留学した個々の中国人留学生に対する研究成果は枚挙に暇がない。だが、上記3書のいずれもが、必ずしも一般的に有名ではない留学生の研究をも深化させている。これまでの研究蓄積に鑑みて、早稲田大学と明治大学における試みのように、今後は何らかの概念を手がかりにして戦前期日本のアジア・中国人留学生を分析していくことの重要性が高まっていくであろう。

しかし、個別の留学生研究において、日本においてまだ十分に論じられていない人物もいることは確かである。特に、留学からの帰国後、第二次世界大戦後の中華人民共和国における彼らの歩みに関する研究は、今後の課題であろう。戦前期の日本に留学した中国人留学生は、反右派闘争や文化大革命の中で、その留学経歴を一つの理由として迫害を受けた例も多かったはずである。楊威理⁵⁾、朱紹文⁶⁾らはその一端を改革開放以後の著作の中で吐露している。とはいえ、現在の中国では、先述の『甘肅日報』の江隆基に関する記事のように、元日本留学者が1966年から始まる文化大革命でなぜ迫害されたなければならなかったのかについてはもちろん、迫害を受けた事実そのものについても全く触れられないのが普通である。

本稿では、まだ日本では十分に論じられておらず、特に反右派闘争や文化大革命での様相が広くは知られていない元日本留学者として、江隆基を取り上げる。

(5) 楊威理『豚と対話ができたころ：文革から天安門事件へ』岩波書店、1994年。

(6) 朱紹文『經典經濟学与現代經濟学』(北京大学出版社、2000年)の「自序」。

三 江隆基の生涯

近代の中国人留学生の経歴を網羅した書物『中国留学生大辞典』（周棉編、南京大学出版社、1999年）には、江隆基の項目があり、その記述を以下に訳出する。

「江隆基（1905-1966）日本、ドイツに留学。陝西省西郷出身。1924年北京大学予科入学。1927年共産党入党、9月に明治大学政治経済学部入学、中共東京支部の活動に参加。1929年12月反日デモに参加したため国外追放となり帰国。1931年ドイツベルリン大学経済学部に留学。“九一八”事変（引用者注：満州事変）後、在独在欧華僑反帝大同盟を組織した。1936年11月に帰国、陝西省立第二中学校長となった。1938年以後、延安陝北公学副教務長、延安大学副学長、陝甘寧辺区教育庁副庁長を歴任した。新中国成立後、西北軍政委員会教育部長、北京大学の初代党委書記兼副学長を歴任した。1957年の反右派闘争後、降格され中共蘭州大学党委員会書記兼学長に異動となった。“文化大革命”初期に迫害を受け死去。第一期全国政治協商会議委員、第一、三期全国人民代表大会代表に選ばれた。著書に『高等教育の基本経験』などがある。訳書に『マルクス主義批判者への批判』、『新経済学大綱』などがある。」⁽⁷⁾

『中国留学生大辞典』は1999年に出版されており、中国の言論状況も現在とは異なるところがある。同書には、蘭州大学学長への赴任は北京大学党委書記・副学長からの降格人事であったこと、文化大革命の迫害を受けて死

(7) 周棉編『中国留学生大辞典』南京大学出版社、1999年、113頁。

去したことが明記されている。

一方、2007年に出版された『民国人物大辞典』にも江隆基の項目があり、その記述を以下に訳出する。

〔江隆基 (1905-1966)〕

陝西省西郷出身。1905年(清光緒三十一年)生まれ。1920年、西安第二中学入学。1924年秋、国立北京大学予科入学。1926年国立北京大学に入学。1927年6月、中国共産党に加入し、9月に日本へ渡り明治大学政治経済学部入学。1929年12月、反日デモに参加したため国外追放となり帰国し、上海で中共街道支部書記と中国社会科学者連盟執行委員となる。1931年3月、ドイツに赴き、ベルリン大学経済学部に留学。在独華僑反帝同盟書記と在欧華僑同盟書記を務めた。1936年11月に帰国後、西安“綏靖”公署政治処上校秘書の身分で、抗日救国民族統一戦線の活動に従事。西安事変後、陝西省第二中学校長となる。1937年、抗日戦争勃発後、山西臨汾民族革命大学教授に招聘される。1938年延安に赴くのと前後して、陝北公学副教務長、陝北公学関中分校副校長兼教務長を務める。1939年河北連合大学教務長を務めた。1942年、延安整風運動に参加したあと、延安大学副学長に任命される。抗戦勝利後、陝甘寧辺区教育庁副庁長を務めた。中華人民共和国成立後、西安軍事管制委員会教育処処長、西北軍政委員会教育部部長を務め、北京大学の初代党委書記兼副学長となり、蘭州大学党委書記兼学長となった。第一期中国人民政治協商会議代表、第一、三期全国人大代表、中共第八次全国代表大会代表、中共北京市委員会委員、中共甘肅省委員会委員に選ばれた。1966年逝去。享年61歳。著書に『辺区教育の回顧と展望』、『高等学校活動の規律への試論』、『高等教育の基本経験』等がある。訳書に、『マルクス批判者への批判』、『新経済学大綱』、『ス

ターリンと赤軍』などがある。」⁽⁸⁾

中国国内での研究の進展もあってか、やや詳しい記述となっているが、反右派闘争や文化大革命との関わりについては逆に全く触れられていない。

ともかく、両書の記述にもとづけば、江隆基はまず北京大学に学び、中国共産党に入党し、日本で明治大学に留学するが抗日活動のために日本を追われ、さらにベルリン大学で学び、帰国後特に中華人民共和国成立後は中国共産党の下で教育に従事し、北京大学副学長と蘭州大学学長を務め、61歳で生涯を閉じたことになる。なお、江隆基生誕100年を記念して出版された『江隆基教育文選』では、江隆基の足跡をより詳しく年表にまとめている⁽⁹⁾。これによると、江隆基は、1929年9月4日、日本軍国主義の日本侵略に抗議する「銀座デモ」に参加したために警視庁に逮捕、収監され、3ヶ月後に国外追放となって帰国したとされる。

1950年から60年代の江隆基については後述するとして、まずは日本留学時代の江隆基に注目したい。

四 日本留学

苗高生が1991年に著し、韋明と邱鋒の協力によって増訂して2015年に出版された『江隆基伝』は、江隆基に関する最も詳しい評伝であろう⁽¹⁰⁾。同書では、江隆基の出生から、北京大学への入学、中国共産党入党、日本留学と強制帰国、上海での党活動からドイツ留学、ドイツでの反帝国主義運動、延安での教育活動、人民共和国での教育事業への参画、北京大学副学長就任か

(8) 徐友春編『民国人物大辞典』（増訂本）、河北人民出版社、2007年。

(9) 『江隆基教育文選』編集委員会編『江隆基教育文選』蘭州大学出版社、2005年、330-332頁。）

(10) 苗高生、韋明、邱鋒著『江隆基伝』蘭州大学出版社、2015年。

ら解任、蘭州大学学長就任から文化大革命での迫害死、文革終結後の名誉回復までが網羅的に記述されている。以下では、主に同書の第二章に依拠して、日本留学時代とその前後の江隆基をふり返ってみる。

江隆基は1924年の夏に、西安から北京（当時は北平）に到り、翌年春に北京大学に入学した。北京大学志望は、西安での中学時代の師楊明軒の影響によるという⁽¹¹⁾。北京大学入学後の自身について江隆基は「北京大学に入ると、私は各種の異なる思想の影響を受け、何を選べば良いのか分からなかった。私は李大釗の共産主義、顧孟余の三民主義、胡適の自由主義などどれもよいと思った。勉学の面では、胡適の影響がより大きかった。」⁽¹²⁾と述べている。一方、李大釗の演説を聴いたことにより、愛国民主の運動に参加し、マルクス主義を受け容れ、革命家の道を歩むことになったともいわれる⁽¹³⁾。これは、当時の北京大学の多様な学術思想の状況を反映しているであろう。この当時の北京大学の学風が、江隆基の思想形成と後の教育事業に影響を与えていることは間違いない。

一方、当時の北京と中国は、軍閥戦争の混乱のさなかにあった。また、1924年に五・三十運動が起こり、1926年には日本軍による天津での砲撃、1927年には日本の第一次山東出兵があり、反帝国主義運動が高まりを見せた時期でもあった。その渦中にあった北京大学で、江隆基は愛国民主運動に身を投じていったという⁽¹⁴⁾。

一方、1924年には第一次国共合作が成立し、1926年には中国統一を目指した国民革命軍による北伐が開始された。国共合作は長くは続かず、1927年4月には蒋介石がクーデターを起こし、共産党員の弾圧が始まった。その

(11) 前掲書、27頁。

(12) 前掲書、27-28頁。

(13) 宋超『歲月有痕—我与隆基一起的日子—』蘭州大学出版社、2011年、68頁。

同書は、江隆基夫人宋超による江隆基の回想録。

(14) 前掲『江隆基伝』、29-31頁。

さなか、中国共産党の指導者で北京大学教授の李大釗が、張作霖の軍閥に捉えられ処刑された。この状況下で江隆基は、かつて五四運動に参加した中学時代の恩師陽明軒の教え、李大釗らの講じたマルクス主義、北京大学での愛国運動への実践経験から、マルクス・レーニン主義の追求を決意し、1927年6月、中国共産党に入党する道を選んだ⁽¹⁵⁾。

1927年8月、北京大学に在学していた江隆基は、日本にいる長兄裕基から手紙を受け取り、裕基が東京で官費留学生に採用されたことを知らされた。兄の江裕基は、隆基も東京に来て官費留学生になるか、なれなくても一緒に東京で勉学を続けることをすすめた。経済的困難から北京大学で修学を続けることが難しくなっていた江隆基は、兄のすすめに従い日本の東京に渡った⁽¹⁶⁾。二人は中国人留学生が多く住んでいた大岡山に下宿した。中国人留学生の多かった大岡山には、二軒の中華料理店があり中国人留学生に比較的安価に食事を提供していた。しかし二人は、儉約のために下宿のまかないで食事を済ませた⁽¹⁷⁾。東京での江隆基は物見遊山などせず、日本語を習得することに集中した。兄の江裕基はすでに日本語を習得しており、河上肇の『階級闘争の必然性と其の必然的転化』の他、『顕微鏡下の資本主義』を翻訳し北新書局から出版していた⁽¹⁸⁾。兄の助けもあり、江隆基はわずか半年の間に基本的に日本語を習得し、翌年の3月には明治大学経済学部本科に合格することが出来た⁽¹⁹⁾。明治大学在学中は、経済学の学習に取り組み、幅広く経済学書を読み、マルクス主義経済学の研鑽に集中した。特に河上肇の著作に惹かれ、兄裕基とともに、河上肇の著作を学びながら中国語に翻訳することに取り組んだ。下宿と明治大学は近くはなかったが、時には一日に何度も大

(15) 前掲書、32頁。

(16) 前掲書、39-40頁。

(17) 前掲書、40頁。

(18) 同上。

(19) 同上。経済学部とは政治経済学部のことであろう。

学と下宿を往復して、一句の意味を調べ多くの人に問うた。その結果、1929年には、『マルクス主義経済学』と『新経済学大綱』の二冊を訳出することが出来た⁽²⁰⁾。

ここで、二人による河上肇の著作の中国語訳について、言及しておきたい。江裕基が翻訳したという河上肇の『階級闘争の必然性と其の必然的転化』（弘文堂書房、1926年）には、3種の中国語訳が出版されていることを確認している。これらは新華書局、創造社出版部、新生命書局から出版されており、訳者はそれぞれ、不明、沈綺雨、陳宝驊・邢墨卿・薩孟武であり、江裕基の名はない。河上肇の『マルクス主義経済学』（上野書店、1928年）は、温盛光訳の啓智書局版（1928年）、鄧毅訳の光華書局版（1929年）と大光書局版（1936年）、李季訳の上海人民出版社版（1936年）がある。しかし、訳者として江隆基、江裕基の名は見出していない。また河上肇に『新経済学大綱』という著作はなく、河上肇の『経済学大綱』（改造社、1928年）は、陳豹隱訳が楽群書店から1929年に出版されている。

先述の『中国留学生大辞典』で江隆基の訳書としてあげられている『マルクス主義批判者の批判（中国語表記：対馬克思主義批判者的批判）』ないし、『民国人物大辞典』であげられている『マルクス批判者への批判（中国語表記：対馬克思批判者的批判）』は、河上肇の『マルクス主義批判者の批判』（希望閣、1929年）の翻訳ではないかと思われる。同書は、江半庵を訳者名として『馬克思主義批判者之批判』の中国語題名で1930年に上海の申江書店から出版されており、翌年には『唯物弁証法者的理論闘争』題名を変えて上海の星光書店から出版された⁽²¹⁾。江半庵は江隆基の別名である⁽²²⁾。

(20) 前掲書、40-41頁。

(21) 拙著『甦る河上肇—近代中国の知の源泉—』（藤原書店、2003年、259-260・279-280・283-284頁）。

(22) 前掲『江隆基伝』、1頁。その他に人名辞典類にも、江隆基の別名として江半庵を挙げているものがある。

以上のように、『マルクス主義批判者の批判』以外に、江隆基ないし江裕基らしき人物が中国語訳した河上肇の著作は見出してない。なお、江裕基の別名である江伯玉の訳とされる『マルクス主義経済学大綱』が河上肇の著作の中国語訳として二次史料に見出されるが、実物は未確認である。現在では実見することが難しい彼らの訳書が存在するのかも知れない。あるいは、他の訳者の訳業を手伝うなど、何らかの形で河上肇の著作の中国語訳に関与したということかも知れない。また『江隆基伝』の筆者が何にもとづいて江隆基と江裕基の訳業について記述したのかは不明である。

いずれにせよ、当時の河上肇の影響力の強さに鑑みれば、日本に留学した江隆基が河上肇の著作に基づいてマルクス主義とマルクス経済学への理解を深めていったことは、自然なことと考えられる。さらに、江隆基が北京大学で接した李大釗も、河上肇の著作を通じてマルクス主義を摂取した人物であった。

江隆基の日本留学時代に話を戻す。江隆基が留学する前の1925年、秘密組織として中共東京特別支部が設立されていた。江隆基は、東京で中共東京特別支部の責任者童長栄と知り合った。江兄弟の日本語学習熱と河上肇への傾倒に影響を受けた童長栄は、1927年に江兄弟のほか、廖承志、鄭漢先らとともに社会科学研究社を設立した。この社会科学研究社では、当時盛んに出版されていた日本のマルクス主義関係の著作を読み、社会主義に関する様々な問題を討論していった。江兄弟はここで大きな収穫をえたという⁽²³⁾。

国共分裂の影響は東京の中国人留学生にも及び、中共東京特別支部は1928年3月から蒋介石率いる国民党右派に反対する宣伝活動を始め、社会科学研究社もその指導下で活動を行った。

1928年4月には、愛国将軍とされる楊虎城が秘密裏に東京へ渡ってきた。楊虎城は、馮玉祥の下で北伐に従軍していたが、1927年の蒋介石による反

(23) 前掲書、41頁。

共クーデターに疑問を感じ、中国を離れ日本に渡って来たのであった。楊虎城は日本の帝国主義者に反対していたので、日本で帝国主義者の実態を見ることも日本に渡った理由であったという⁽²⁴⁾。江兄弟と楊虎城は同じ陝西出身の同郷人という縁で、東京で知り合うことになった。江隆基は、日本と中国の共産党の状況、日本帝国主義による侵略の実情、日本にいる中国人留学生の状況などを楊虎城に語り聞かせ、侵略戦争に反対する日本の人民との友好と団結を説いたという⁽²⁵⁾。

楊虎城は後に1936年の西安事件で、張学良とともに蒋介石を監禁し、蒋介石に対して国共内戦の停止と抗日のための挙国一致を要求したことで、中国内外に広く名を知られることになった。また、中国に帰国後の楊虎城は、1931年には江隆基のドイツ留学を支援した⁽²⁶⁾。

再び江隆基の日本留学に話を戻す。1929年8月には、中共東京特別支部の指導の下、社会科学研究所を中心として留日中国学生反帝大同盟が組織された。江隆基はこの同盟の宣伝委員会責任者となった。同時に、江隆基は明治大学中華校友会の主任も務めていた。

日本の南満洲への出兵に抗議する活動で中国人留学生が拘束されたことに抗議するため、1929年9月4日夜9時、江隆基ら反帝大同盟は東京銀座でデモを決行した。その場で20人あまりが逮捕され、その後数日のうちに数百人が逮捕された。江隆基は、拷問を受けながらもデモに参加したこと自体を認めなかったが、仲間のうち口を割ったものが出たためデモに参加したこと自体は認めた。また、明治大学中華校友会の責任者であること、陝西と甘肅の同郷人団体を組織したことは認めたが、これらは政治と無関係であると主張し、共産党、社会科学研究所、反帝大同盟に関することは知らないふりを通した。罪状を見出しえなかった警視庁は、江隆基を「共産党の卵」だと

(24) 前掲書、44-45頁。

(25) 前掲書、45-46頁。

(26) 前掲書、54-56頁。

して国外追放とした⁽²⁷⁾。

以上が『江隆基伝』に基づいた江隆基の日本留学時代の様相である。実は、江隆基の明治大学留学に関する史料を、明治大学内においてはまだ見出してはいない。しかし、内務省警保局保安課外事係『中国共産黨日本特別支部檢舉事件』（作成年不明、内部資料）の附録第三表には、「中華留日社會科學研究聯盟組織」の「明大組Ⅰ」に江隆基の名がある⁽²⁸⁾。江隆基が日本の警察当局の監視を受けていたことがこの資料から分かり、江隆基が何らかの形で明治大学に在籍していたことも確かだろう。

2018年3月に蘭州大学檔案館で、江隆基関係の史料を調査した際にも、明治大学留学に関する史料は見出せなかった。また、江隆基の明治大学留学に関する史料の所在については、同檔案館の職員の方々も分からないとのことであった。江隆基にとっては、学びの場としてよりは、中国共産黨の日本における政治運動の拠点としての明治大学の意義の方が大きかったのかも知れない。それでも、明治大学においてどのような講義を受け、特に誰に師事したのか、そして江隆基にどのような思想的影響をおよぼしたのかは、今後追究すべき課題である。

なお、江隆基は蘭州大学学長在任中の1963年に、中国學術代表団を率いて日本を訪問しており、その写真が『江隆基伝』に掲載されている⁽²⁹⁾。ただし、この訪日について同書には全く説明がない。訪日時に誰と会いどのような発言をしたのか、明治大学を訪問したのか、江隆基の戦後の訪日についての調査も今後の課題としたい。

江隆基は、北京大学での学生運動を経験した上で日本に留学し、マルクス主義の知識と理論の摂取に努める一方、中国共産黨員として東京で中国人留

(27) 前掲書、48-50頁。

(28) 筆者が実見した同資料は早稲田大学中央図書館蔵。この史料については、前掲拙著284頁で、言及したことがある。

(29) 前掲『江隆基伝』、395頁。

学生の政治運動を組織し、最後には逮捕され国外追放された。これだけでも江隆基は十分波乱に富んだ留学生生活を送ったといえる。帰国後に北京、上海で反帝国主義、反国民党の運動に参画すると、楊虎城の懲遷と支援により、さらに1931年4月からベルリン大学経済学部⁽³⁰⁾に留学した。ベルリンでも江隆基は反帝国主義運動を組織し、中国共産党員として活動していた。

1926年の入党以来、1966年の死に到るまで、江隆基は一貫して中国共産党員であった。一方で、様々な新思潮が語られ追究されていた1920年代の北京大学に学び、日本とドイツという異文化圏での生活も経験している。先述のように、胡適の自由主義に惹かれたり、日本人民との友好を主張したり、北京、東京、ベルリンで学び波乱の留学生生活を送った江隆基の思考には柔軟な面があったのではなかろうか。

日本からの国外退去から20年以上の後、人民共和国成立後の中国の大学における指導者としての江隆基の事績を、以下に検討していく。

五 北京大学副学長・蘭州大学学長として

1948年に中国共産党が北京（当時は北平）を掌握すると、党の軍事管制委員会の下、北京大学の再編がすすめられた。北京大学出身でかつ一時期北京大学経済学部で教鞭を執り、中国内外で著名な経済学者となっていた馬寅初が、1951年6月1日学長に任命された。馬寅初は、北京大学に招聘する人選を自らに任せるよう毛沢東に要請し、その要請を毛沢東も承認した。一方で、馬寅初は自らが中国共産党員でないことに鑑み、党員として大学の運営を補佐してくれる人物を党が派遣することを希望した。そこで選ばれたのが、馬寅初がかつて教鞭を執っていた時期の元北京大学学生であり、革命運動の豊富な経験を有する党員の江隆基であった。1951年10月、江隆基は北

(30) 前掲書、50-56頁。

京大学副学長に就任した。江隆基がマルクス主義を学び始めたのも中国共産党員となったのも北京大学の学生時代のことであり、この母校に副学長として戻って来られたことを江隆基自身も大変喜んだ⁽³¹⁾。

馬寅初と江隆基の協力の下、北京大学は「黄金時代」を迎えたとされる。北京大学を退職したかつての教職員は皆一様に、20世紀の50年代、特に1952年から反右派闘争前の1957年までの時期の北京大学を「黄金時代」と表現するという⁽³²⁾。この雰囲気は、国内の政治状況の反映であるのみならず、多様な思潮が共存した時代の北京大学を知り、国外で学び経験を積んだ馬寅初学長と江隆基副学長の下でこそ実現したものであろう。

1956年の百花斉放・百家争鳴運動を経て、1957年6月から反右派闘争が発動されると、北京大学と馬寅初学長、江隆基副学長もこの波乱に巻き込まれざるをえなくなった。江隆基は反右派闘争そのものには反対ではなく、党の方針に忠実に北京大学においても反右派闘争をすすめるようとした。一方学長の馬寅初は、その「新人口論」によって右派であると認定されてしまった。江隆基は、これは学術問題であって馬寅初に対して軽々と政治的右派のレッテルを貼ってはならないとして、可能な限り馬寅初を擁護しようとした⁽³³⁾。また、人為的に右派を作り出すようなやり方に反対し、本来党と社会主義を擁護するはずの北京大学の学者と学生を守ろうとした⁽³⁴⁾。

江隆基のこのやり方は、陳伯達、康生ら党指導部の不満を引き起こし、中共中央は1957年10月に別の副学長を北京大学に送り込んだ。江隆基はなおも自らの身の危険を顧みず、北京大学の知識分子を守ろうとした⁽³⁵⁾。1958年5月の北京大学創立60周年の記念大会で、陳伯達は党中央を代表して「共

(31) 前掲書、265-271頁。

(32) 前掲書、291頁。

(33) 馬寅初は1960年に北京大学学長を解任された。

(34) 前掲『江隆基伝』、326-330頁。

(35) 前掲書、330-331頁。

産主義の新北京大学を建設するため奮闘せよ」という演説を行った。これに対して江隆基は「共産主義の経済的基礎もなく共産主義の大学ができるのか？」と批判し、陳伯達にこの考え方を電話で伝え議論した。この件は、江隆基に対する「右傾」の罪名を強めることとなり、1958年8月に江隆基は北京大学から解任されることが告知された。次の職場として合肥工業大学と蘭州大学を提示された江隆基は、蘭州大学を選んだ⁽³⁶⁾。

蘭州へ出発しようと準備を進めていた江隆基は、北京大学党委員会が招集する整風会に出席することを通達された。整風会では、江隆基は党が発動した政治運動のさなかにも授業を停止して学生を運動に参加させることをせず、北京大学の授業を続けさせたことなどが指弾され、江隆基は一方面的な批判を受け続けた。反右派闘争における江隆基の態度は、「温情思想」であり「右傾思想」であったと批判された。1958年10月下旬から12月末まで2ヶ月あまり続いた整風会において、江隆基の5つの右傾錯誤を指摘する鑑定書が出された。江隆基は決してこれを肯んずるものではなかったが、妻に対しては「ことの理非曲直は、実践と歴史に証明させよう」と語っていた⁽³⁷⁾。

江隆基が蘭州大学に赴任した背景には反右派闘争があった。だが、北京から見れば辺境に位置する大学とはいえ、学長として教育界の指導者にとどまったことで、古参黨員の自負をもつ江隆基は、自らの行く末をいささか樂觀していたのかも知れない。また、反右派闘争で混乱した北京大学での経験を教訓に、より理想的な教学の環境を蘭州大学で実現しようとしたとも考えられる。それは蘭州大学での江隆基の以下のような発言から看取される。

蘭州大学着任後間もない、1959年10月頃の発言では、「前学期は教育の大革命が勇ましく盛大に過ぎた学期であった。“教育をプロレタリア階級の政治に奉仕させ、教育と生産労働を結合させる”という党の教育方針がさら

(36) 前掲書、332-333頁。なお、江隆基を蘭州大学学長に任命する旨は、1961年12月20日発行の「中華人民共和国国务院公報」1961年第18号に掲載されている。

(37) 前掲書、335-336頁。

に全面的に貫徹された学期でもあった」⁽³⁸⁾としつつ、教学秩序を強調し、労働を大学教育に組み込みつつも、授業時間を確保し学生を授業と自習とに向かわせようという意図を打ち出している。江隆基は、「大学生と“普通の労働者”を同一視することは一種の誤解である。“普通の労働者の姿をすることによって、普通の労働者の感情と思想をそなえること”と、“普通の労働者（そのもの）”を混同している。」「生産労働と教学の関係において、学校における生産労働は教学に役立つものでなければならず、その目的は教学の内容を豊富にし、教学の質を向上させることにある。」と考えていた⁽³⁹⁾。「教育の大革命が勇ましく盛大に過ぎた」とは、大学における反右派闘争の激しさとそれが大学にもたらした混乱を指しているのであろう。

また、百花斉放・百家争鳴のあり方について、蘭州大学学長として江隆基は次のように述べた。

「“百花斉放、百家争鳴”の方針は、科学事業を発展させ、学術の水準を高めるための最も有力な武器であり、団結、教育、知識分子改造の最も有効な方法である。この方針を貫徹するため、指導者の角度からいえば、各種の異なる学派と異なる学術的見解に対して、自由に討論し、自由に発言し、自由に競争することを積極的に奨励すべきであり、ある一派が学術的に独占することを許してはならない。また、学術的論争に軽々しく結論を下したり、ある学派を押しついたり、ある学派を抑圧したり禁止したりすることがあってはならない。学術討論においては、平等の精神を堅持し、揚げ足を取ったり、レッテルを貼ったり、言いがかりをつけたり、決めつけたり、多数によって少数

(38) 「江隆基同志発言：蘭州大学關於提高教学質量的初步經驗」（蘭州大学檔案 1-442-3）。

(39) 江弘基「無産階級教育家江隆基教育実践紀略」『陝西師大学報告（哲学社会科学版）』1983年1期、99頁。

を屈服させたりしてはならない。自由に意見を發表すること、意見を堅持すること、意見を保留することを許容しなければならない。……同時に、政治問題、思想問題、學術問題、仕事の方法の問題をきちんと区別し、これらをない交ぜにしてはならない。……學術問題の中でも哲学領域の問題についていえば、唯物論と唯心論、弁証法と形而上学の間の論争があるように、2つの階級と2つの世界観の間の論争があるが、これも學術的性質を有する問題であり、具体的な分析と自由な討論という方法によって解決すべきであり、簡単に乱暴な方法をとってマルクス主義の世界観を人に押しつけてはならない。」⁽⁴⁰⁾

これは、中国共産党中央が批准し全国に通達した「自然科学研究事業に関する14条の意見」を巡る蘭州大学での討論会における、江隆基学長による開幕の言葉である。この討論会は、1962年9月29日から行われた。「百花斉放、百家争鳴」が知識分子改造の最も有効な方法であるとかつての党の方針を肯定しつつ、マルクス主義の世界観を人に押しつけてはならないとまで言い切り、江隆基自身が考える自由と寛容を強く主張している。北京大学での反右派闘争の結末を念頭においての発言であることは間違いない。

1964年度の蘭州大学新入生を迎えての演説を、江隆基は以下のように締めくくった。

「学生諸君は初めて蘭州、蘭州大学に来て、初めのうちはどうしてもなじめないこと、慣れないことがあるでしょう。学生諸君は全国津々浦々広い地域から来ており、知人もなければ土地にも不案内です。これが第一になじめないこと、慣れないことです。学生諸君は中学から

(40) 江隆基「1962年全校科学討論会開幕詞」『江隆基教育文選』蘭州大学出版社、2005年、304頁。

大学に入ったばかりで、大学での勉学の方法と生活の仕方は、いずれも中学とは違います。これが第二になじめないこと、慣れないことです。学生諸君は、華北、華中、西南地域から西北に、平地から高原に來たのなら、気候や飲食と生活習慣がどれも異なるに違いありません。これが第三になじめないこと、慣れないことです。しかしこれらはいずれも大した問題ではありません。学生諸君が助け合い、学校の関係部署が協力すれば、あまり時間がかからずにだんだんとなじみ、慣れ、適応していけるに違いありません。学生諸君、学校は君たちの第二の家庭です。君たちが学校に來たということは、この家庭の一人の主人公になったということです。大いに批判し、大いに意見を表明し、力を合わせて我々の学校をよくしていくことを希望します。」⁽⁴¹⁾

しかし蘭州大学での教学への尽力も長くは続けられず、1966年5月16日には中国共産党中央委員会がいわゆる「五一六通知」を發して文化大革命が發動された。甘肅省党委員会は、蘭州大学で一部の「積極分子」を文化大革命に動員し、学内には「校内犯罪集團」を指弾するポスターが掲げられるようになり、学生が教師を吊し上げ、学生が学生を吊し上げる混乱がもたらされた。このような事態に際しても江隆基は、自身と大学に対する批判を歓迎する旨を表明していた。教師に対して暴力を振るう学生には、現場に行って「言論によって闘うべきであり武闘をすべきではない」と説得した。また、全学の教職員に向かって、政治運動は半日にとどめ半日は勉学に専念すること、暴力を振るわないこと、学生を批判闘争の対象にしないことなどを提起した。江隆基学長のこのような態度を教職員の大勢は支持していたが、6月7日以降、甘肅省党委員会が派遣した「工作團」によって、「右派」、「反革

(41) 「江校長對新生報告」(蘭州大学檔案 5-119-2)。江隆基の自筆になるこの原稿は「向新生講話提要 1964.9.2」と題されている。

命分子」の「掃蕩」が始まった。この中で、蘭州大学全学学生の25.5%、教職員の32.8%が、暴力的方法により吊し上げられ、大学は恐怖のどん底にたたき落とされた。このようなやり方に同調しなかった江隆基も「右派」、「反革命」の罪状を着せられた。6月22日には、中国共産党甘肅省委員会が提出した「江隆基の党内外における一切の職務を解任する決定」を党中央が批准した。6月25日には、蘭州大学運動場において、甘肅省党委員会工作団によって江隆基を吊し上げる「万人大会」が開かれ、残忍な凌辱を受けて江隆基は世を去った⁽⁴²⁾。このように江隆基は文化大革命最初期の犠牲者となったのである⁽⁴³⁾。

では、北京大学副学長、蘭州大学学長時代の江隆基を、学生や若手教員はどのように見ていたのだろうか。

六 回想の中の江隆基

江隆基の最期について、江隆基の北京大学副学長時代の元学生鄧蔭柯は、次のように語っている。

「1957年に江（副）学長は北京大学の反右派闘争を指導した。……しかし心優しい彼は手を下すことが出来ず、自ら育てた花木が一つでも折られていくのを見るに忍びなかった。……80年代初期に、私は蘭州で会議に出席し、元同級生に久しぶりに会い、はじめて江学長の悲惨な最期を聞かされた。……今に到るまで自殺か他殺かは分からないが、黄河の河辺で死体となって発見された。寛容で善良だった彼はそれゆ

(42) 前掲『江隆基教育文選』収録の江隆基の年譜では、江隆基の死去した日をこの6月25日としている(332頁)。

(43) 前掲『江隆基伝』、461-469頁。

え重い代償を払うことになったのだ!」⁽⁴⁴⁾

1952年に北京大学物理学科に入学した物理学者で「中国のサハロフ」と呼ばれた民主運動家でもあった方励之への追悼文の中で、沈克琦は次のように江隆基に言及している。

「(反右派闘争の)初期, ある時の党委員会の会議で, 江隆基副学長は“学生に広場で集会を開かせてはならない, なぜならば学生は熱しやすく, そのまま街頭デモに出てしまったりするからだ。集会やはり屋内で開くのが良い”と主張したことをおぼえている。これは学生を思いやる考えから出た話であった。」⁽⁴⁵⁾

方励之の世代の北京大学の学生は、蔡元培の時代からの受け継がれた「民主と科学の精神」、「独立の精神と自由な思想」という雰囲気の中で成長し、科学と民主を追究することが自然と彼らの固い理念となっていたという⁽⁴⁶⁾。北京大学における方励之の学生時代とは、まさに馬寅初学長、江隆基副学長の時代である。

江隆基の副学長時代の北京大学を、当時同大学に在職していた王学珍は次のように回想している。

「当時、北京大学運営の指導者は、大部分が非党員の教授であり、各学部学科レベルではさらにそうであった。江隆基が着任してすぐに強調したのは、党員幹部は非党員の同志と団結して仕事をし、非党員も表

(44) 鄧蔭柯「回憶馬寅初和江隆基校長」『群言』1998年7期, 31-32頁。

(45) 沈克琦「北大精神的卓越踐行者—追憶北大校友方励之教授」『華夏文摘』2014年4月18日。

(46) 同上。

に立てて仕事をすすめるようにしなければならず、党の方針も彼らを通じて貫徹しなければならないということであった。」⁽⁴⁷⁾

また江隆基は非党員の馬寅初学長を尊重していたという⁽⁴⁸⁾。1956年に党によって科学に向かって進軍しようという政治運動が発動されると、一部の学生は性急な運動をしようとした。しかし江隆基は、教学を離れてはならず、「科学に向かっては一步一步進軍しなければならず、一気に上り詰めることは出来ない。科学へ向かっての進軍には必ず先生の指導が必要である」⁽⁴⁹⁾と、学生に説いていた。王学珍はまた、先述した北京大学創立60周年での陳伯達の演説に対する江隆基による批判にも触れている。1958年に「大躍進」「教育革命」が発動されたときも、江隆基は大衆運動という方法に与せず、「教育研究の仕事は、このような大衆路線を取ることもこのような運動を行うことも決して出来ない」⁽⁵⁰⁾と述べていたことを回想している。王学珍は1980年代に中国共産党北京大学委員会書記を務めた人物で、1989年の民主化運動に際しては、学生を擁護する立場をとり続けたという。

七 まとめにかえて

反右派闘争と文化大革命前の中国には、なおも多様な学問的背景を有する学者が活動する余地があった。北京大学では江隆基が副学長と中国共産党委員会の書記を務め、馬寅初が学長を務めた。江隆基自身は古参の中国共産党員でありマルクス主義者であることを自認していたが、アメリカのイェール大学とコロンビア大学に学んだ馬寅初は、マルクス経済学者ではなく中国共

(47) 王学珍「江隆基与北京大学」『中国高教研究』2005年12期、20頁。

(48) 王学珍「江隆基与北京大学」『中国高教研究』2005年12期、20頁。

(49) 同上。

(50) 同上、21頁。

産党員でもなかった。馬寅初は「新人口論」によって右派のレッテルを貼られ攻撃を受けたが、本来の経済学的観点が異なり党員でもある江隆基が馬寅初を擁護しようとした。

他の例を挙げれば、1950年代に農業協同化に関する論争に参加した中国科学院経済研究所の巫宝三は、ハーバード大学留学の経歴を有しており、本来はマルクス経済学者ではなかった。巫宝三は、毛沢東がすすめようとしていた農村の人民公社化に到る急速な農業協同化に批判的立場を取っていた。これは毛沢東の一派と劉少奇の一派という政治的対立の反映というだけではなく、個々の学者がもつ学問的立場の相違であったともいえるのではなからうか。

江隆基の生涯からは、若き日にマルクス主義を学び、反帝国主義運動に参加し、生涯中国共産党員の立場を堅持しながらも、異なる思想や見解にも寛容であり続けようとしたことが読み取れる。北京大学や蘭州大学をはじめとする1950年代の中国の大学や高等研究機関では、人民共和国成立以前に中国内外で学び取った知の成果を還元し、自由な学問と多様な思想を展開する状況に近づいていたのではなからうか。中華人民共和国における自由な学問と多様な思想の展開には、日本をはじめ国外に留学した経験を有する知識人が大きな役割を果たしたかも知れない。ここに、反右派闘争、文化大革命、天安門事件を経た今日、江隆基や馬寅初をはじめ、1950年代の中国学術・教育界を生きた知識人の歩みを検証することの意義があろう。

(参考文献)

- 鄧蔭柯「回憶馬寅初和江隆基校長」『群言』1998年7期。
 江弘基「無産階級教育家江隆基教育実践紀略」『陝西師大学報告（哲学社会科学版）』1983年1期。
 『江隆基教育文選』編集委員会編『江隆基教育文選』蘭州大学出版社、2005年。
 苗高生、韋明、邱鋒著『江隆基伝』蘭州大学出版社、2015年。

宋超『歲月有痕—我与隆基一起的日子—』蘭州大学出版社, 2011年

徐友春編『民国人物大辞典』(增訂本), 河北人民出版社, 2007年。

王学珍「江隆基与北京大学」『中国高教研究』2005年12期。

周棉編『中国留学生大辞典』南京大学出版社, 1999年。

沈克琦「北大精神的卓越践行者—追憶北大校友方励之教授」『華夏文摘』2014年4月18日 (<http://hx.cnd.org/2014/04/18/> 2019年6月23日閲覧)。

蘭州大学檔案 1-442-3。

蘭州大学檔案 5-119-2。

(みた・たけし 商学部准教授)